ともに暮らす家に起きていること
教皇フランシスコ『回勅 ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に』
（2016 年 カトリック中央協議会刊行）より

司祭 バルナバ 大野清夫（清里聖アンデレ教会牧師）

環境問題を教会の信仰から理解することは大切です。聖書、教父、そして現代の霊的指導者の視点から環境問題を捉えた場合、どのように問題が展開するでしょうか。まずは教皇フランシスコの『回勅ラウダート・シ』に手掛かりを求めたいと思います。

『ラウダート・シ』という表題は聖フランシスコの賛歌「ラウダート・シ、ミ・シニョーレ」（「太陽の歌」）から取られたものです。その賛歌は「わたしの主よ、あなたはたたえられますように。わたしたちの姉妹である母なる大地のために。大地は、わたしたちを養い、治め、さまざまの実と色とりどりの草花を生み出します。」と語ります。

聖フランシスコはエコロジーについて最高の模範を示した聖人と言われます。聖フランシスコは私たちを人間の核心へと連れていくのです。もし私たちが自然や環境に畏敬と感嘆の念を持たずにいるならば、私たちは支配者、消費者、冷酷な搾取者となります。搾取は当面の必要を満たすだけです。自然とは、神が語りかけ、神ご自身の無限の美や善を垣間見させてくれる壮麗な一冊の本です。そのことを聖書は「神の永遠の力と神性は、世界の創造以来、被造物を通してはっきりと認められる」（ロマ1:20）と語っているのです。聖フランシスコは、修道院の一部を常に人の手が加わらない状態にしておくことを求めました。それは美の創造主である神を心から仰ぐためです。世界は解決すべき問題であるよりは、歓喜と賛美をもって観想されるべき喜ばしい神秘なのです。聖フランシスコはそのことを手つかずの庭において暗示します。あらゆる被造物の一つひとつが、彼にとっては愛情のきずなによって結ばれた姉妹なのです。「すべてのものの根元的な源に思いをはせるとき、彼はあふれるような敬虔さに満たされ、どんな小さなものでも、あらゆる被造物を自分の兄弟・姉妹と呼んだ。」と聖ボナヴェントゥラは語ります。

ヨハネ・パウロ2世は、真の人間的発展には十全な人格尊重が必要であり、そのために世界への配慮が必要だと呼びかけます。ベネディクト 16 世は、「自然という本は一つで分かちがたいもの」、「人は自分だけで成り立っている自由な存在ではない。人は自分だけで自分にはなりえない。人は精神であり意思であると同時に自然でもある。」と語ります。正教会ヴァルソロメオス総主教は、人間が神の被造界の生物多様性を破壊すること、気候変動、天然林伐採、湿地破壊で人間が地球の十全さをおとしめること、地球上の水や土地や空気や生命を汚染すること、これらはすべて罪であるとします。自然界に対して罪を犯すことは、私たち自身に対して罪を犯すことであり、神に対して罪を犯すことなのです。キリスト者はこの世界を交わりの秘跡として、神と、また地球規模で隣人と分かち合う道として、受け入れねばなりません。

汚染、廃棄物、使い捨て文化は自然界の連鎖（植物→草食動物→肉食動物→有機廃棄物→植物）に悪影響を与えます。産業システムは廃棄物等を吸収、再利用する能力を開発して来なかったのです。

温室効果ガスは大気圏内に蓄積されて、地表で反射された太陽光線の熱が大気圏外に発散するのを防いでいます。営農目的の森林伐採の拡大も温暖化の要因となっています。水問題も深刻です。特定の鉱・農・工業由来の汚染、洗剤や化学製品が川や海に流れ込み、不衛生な水供給による赤痢とコレラは乳児死亡の重大な原因となっています。水の商品化、私有化は紛争を起こし基本的人権を侵害しています。都市の無秩序な成長は有毒排出物による汚染を生みます。都市の成長は必ずしも